作者

村上春樹

昭和二十四（一九四九）年一月十二日～。小説家・米文学翻訳家。京都府京都市伏見に生まれる。両親は国語教師であった。昭和三十六（一九六一）年に兵庫県芦屋市に転居、芦屋市立精道中学校時代に世界文学全集に親しみ、ジャズ音楽に傾倒する。三十九（一九六四）年兵庫県立神戸高等学校へ入学。新聞部に入部し編集長を務めた。このころアメリカの現代小説を原文で読み始める。なかでもチャンドラー、ヴォネガット、フィッツジェラルドなどを耽読した。四十三（一九六八）年早稲田大学第一文学部演劇学科入学。上京し、文京区内の大規模な個人経営の男子学生寮（和敬塾）へ入った。大学は学園紛争の毎日であったが、学生運動とは距離を置いていたようである。映画とジャズに明け暮れる学生生活であった。このときの体験は長編「ノルウェイの森」（昭六十二）に生かされている。四十六（一九七一）年妻である陽子夫人と学生結婚し、四十九（一九七四）年には在学中でありながら国分寺にジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開店し、経営する。五十（一九七五）年卒業論文「アメリカ映画における旅の思想」を書き七年間在籍した大学を卒業した。「風の歌を聴け」（昭五十四）で第二十二回群像新人文学賞受賞。五十六（一九八一）年には、作家として生活していくことを決意し、ジャズ喫茶を廃業した。以後、意欲的に作品を発表していくが、執筆に集中するため六十一（一九八六）年に日本を出て、ギリシャとイタリアに住む。六十二（一九八七）年「ノルウェイの森」が刊行され大ベストセラーになり、これをきっかけに村上春樹ブームが起きる。平成三（一九九一）年プリンストン大学の客員研究員として招聘され渡米する（七年帰国）。九（一九九七）年地下鉄サリン事件の被害者のインタビューをまとめたノンフィクション「アンダーグラウンド」、十二（二〇〇〇）年阪神・淡路大震災をテーマにした連作集「神の子どもたちはみな踊る」を刊行する。日本国外でも評価が高く、十八（二〇〇六）年にフランツ・カフカ賞を受賞し、二十（二〇〇八）年にプリンストン大学より名誉学位（文学博士号）を授与される。二十一（二〇〇九）年エルサレムで行われた授賞式に出席し、ガザ侵攻を批判した記念講演を行う。フィッツジェラルド、サリンジャーなどの作品を翻訳し、随筆、紀行、ノンフィクション等も数多く刊行している。令和三（二〇二一）年早稲田大学キャンパスに「村上春樹ライブラリー」が開館した。

文学活動

主要な小説としては、「羊をめぐる冒険」（昭五十七）野間文芸新人賞受賞、「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」（昭六十）谷崎潤一郎賞受賞、「ノルウェイの森」（昭六十二）、「ダンス・ダンス・ダンス」（昭六十三）、「ねじまき鳥クロニクル」1～3（平八～九）読売文学賞、「スプートニクの恋人」（平成十一）、「海辺のカフカ」（平十四）、「1Q84」1～3（平二十一～二）、「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」（平二十五）、「騎士団長殺し」（平二十九）などがある。

レイモンド・カーヴァーなど翻訳も精力的に行い、主要なものとして、サリンジャー「キャッチャー・イン・ザ・ライ」（平十五）、フィッツジェラルド「グレート・ギャツビー」（平十八）、カポー

ティ「ティファニーで朝食を」（平二十）などがある。また、紀行、エッセイ、写真集、絵本、対談集など多数の著作がある。

作者を解くカギ

村上春樹の世界は、小説ばかりでなく、翻訳、紀行、エッセイ、写真集、絵本など多様なジャンルに渡り、かつまた、初期小説で特徴的な固有名詞の多さ、特に音楽、映画をはじめとして登場人物のライフスタイルに至るまでかなりな複雑さを見せる。しかし、一見すると多彩な姿を見せているようだが、その実、現代作家としてはめずらしく愚直な物書きという印象も捨てきれず、一昔前の「文士」と言われた作家たちの姿勢にも通じるものがありそうである。

村上春樹を解くカギとして注目したいのは、ドライな人間関係をクールに生きる登場人物のスタイルと、それとは対照的に恋愛に悩み、人間に苦悩する登場人物の共存だろう。そして、それらの対照的な人物関係を基底にしながら、小説作品は一貫して、他者との交流、コミュニケーションの不在をめぐって強いイメージを打ち出してきているように思われる。まず、第一のカギはコミュニケーションの希求と言えよう。

第二のカギは、パラレルな視点を小説内に設定し、それによって特権的な視点を消し去ろうとする傾向とでも言えようか。それが最も先鋭的なかたちで提出されたのは、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」で、主人公の異なる小説が、一章ごとに交代に進行していくものであった。「海辺のカフカ」などでも同様の手法が用いられており、他にも「私たち」という一人称複数形でカメラのような視点が登場する「アフターダーク」（平十六）などがある。

また、カギとまで言えないが、村上作品には多くの固有名詞が氾濫する。特に音楽に関しては、ジャズに限らず一九五〇年代～七〇年代のポップミュージックやロックも含めて、執拗なほど多用している。執拗に反復される曲などはあらためて読者としても音源を聞いてみてなにか納得するようなところもあり、村上春樹作品の音楽使用に関しては一考の余地がありそうである。小説内に飲食するシーンがよく出てくるのも特徴的であり、ある特定の年代層の青春時代がそのまま再現されているようなイメージも強い。

文章の特徴として、かなり即物的な面が強く、非常に視覚的な印象がある。あるシーンが先行してイメージを構成し、そのフレームに沿って言葉が当てはめられていくといった感じを持つことが多い。確かに比喩表現も多用されるが、ページごとにそれぞれの場面が映像的に進行していくように思われるのである。おそらくこの辺に多くの読者を得ている秘密があるのではないか。いわば映画を観ているように読める小説と言えるだろう。しかし、そのテーマはかなり難解であり、単純な物語のように読むこともできる一方で、多くの問題を読者へ投げかけている作品が多い。

出典

本文は「村上春樹全作品」1（講談社　平成十四）によった。初出は原題 Losing Blue としてフランスのル・モンド紙（一九九二年）に発表されたものである。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「青が消える（Losing Blue）」→「青が消える」（原文P二七五、教科書P二七四）〔教育上の配慮〕

○会話文の最後の句点は、原文どおり省略」（全体）〔著者の希望による〕

○「NEC」→「N社」（原文P二八一・13、教科書P二四〇・7）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

「村上春樹イエローページ」加藤典洋　荒地出版社　平八

＊代表的な長編小説の作品案内や解説など。

「村上春樹スタディーズ05」栗坪良樹・柘植光彦編　若草書房　平十一

＊作品論や作家論だけでなく、作者の年譜や文献総覧が充実している。

「村上春樹作品研究事典」村上春樹研究会編　鼎書店　平十三

＊二〇〇〇年までの全作品の解説や読みのポイントなどが示してある。

＊生徒用

「風の歌を聴け」村上春樹　講談社　昭五十七

＊小説家であるらしい「僕」が二十代最後の年を迎えて「自己療養へのささやかな試み」として自らの青春時代を語ろうとして始まる話。大学の夏休み中に港町に帰省した「僕」は「鼠」と呼ぶ友人とビールを飲んでは語り合う。そして、自らこれまでに関係した三人の女の子の話を語っていく。恋愛・性・友人・社会との関係と自分の生き方への不安と自信、あるいは諦めのような姿勢などが交錯した青春をクールに描き出す。

「ノルウェイの森」上・下　村上春樹　講談社　平三

＊神戸での高校時代、「僕」（ワタナベトオル）と、親友キズキとその恋人直子の三人は常にいっしょに行動していたが、大学進学目前にキズキは自殺した。「僕」は直子を残したまま東京の大学へ進学し、ある私設の学生寮で暮らし始める。寮生活で知り合った年上の永沢さんは東大生で外交官を目指すエリートだが、彼に誘われるままガールハントに明け暮れるような日々を過ごしていた「僕」の前に、東京の女子大に進学していた直子が、心の病を抱えたまま現れる。その後、直子は関西の山奥にある療養施設で暮らすようになり、「僕」は大学で知った緑とも付き合いつつ直子との関係も続けていく。死を意識した

まま生のまっただ中にある「僕」の葛藤と、恋愛に関わる苦悩を描き、小説家村上春樹を強く印象づけた長編小説である。

「やがて哀しき外国語」村上春樹　講談社　平六

＊「青が消える」執筆時のアメリカ社会の変動や、「よそ者」として外国で暮らす自己や言語について述べたエッセー。

「キャッチャー・イン・ザ・ライ」

J・D・サリンジャー、村上春樹訳　白水社　平十五

＊主人公のホールデン・コールフィールドによる口語的な一人称の語りが特徴。大人や社会の欺瞞や建前を「インチキ」として拒否する青春小説の古典的名作。

「一九八四年」ジョージ・オーウェル、高橋和久訳　早川書房　平二十一

＊一九四九年に発表された近未来ＳＦ小説。一九八四年、人々はビッグ・ブラザーと呼ばれる独裁者に支配され、息苦しい管理社会の中で暮らしている。全体主義国家によって分割統治された世界の恐怖を描いている。